

金澤醫科大學耳鼻咽喉科教室

(主任松田教授)

リガ氏病ニ就テ

豊田文一

栗山要一郎

(昭和7年8月10日受附)

目次

| | |
|------|------|
| 一 緒言 | 四 考按 |
| 二 症例 | 五 結論 |
| 三 文献 | |

一 緒言

1876年伊太利人フエデエ (Fede) ハ生齒期ニ於ケル 哺乳兒ノ舌繫帶部ニ發生シタル腫瘍ヲ *Produzione sottlinguale* トシテ報告セリ。其後1880—1881年同ジク伊太利人リガ (Riga) ガ斯ノ如キ疾患ニ就テ發表スル所アリテヨリ、之ヲ一般ニリガ氏病 (Riga'sche Krankheit) ト命名スルニ至レリ。彼ハ本腫瘍ヲ哺乳兒ニ見ル悪性疾患ナリトシ、該腫瘍ハ舌繫帶ニ於テ略ボ圓形ヲ呈シソノ基底部分ヨリノ剝離困難ニシテ、遂ニ患兒ハ之ガ爲ニ、哺乳不能ニ陥リソノ90%ハ、死ノ轉機ヲトレリト報告セリ。尙本疾患ハ夏期ニ於テ流行シ下層階級ノ生齒期ニ於ケル乳兒ニ多數發見サレ、伊太利ニ於テハ既ニ數十年前ヨリ屢々遭遇セシモノナリト云ヘリ。

爾來獨、埃、露(殊ニ北部)等ノ各地ニ於テモ報告相踵デ出デ、本邦ニ於テモ亦、20有餘ノ報告例ヲ數フルニ至リ、今日ニ於テハ既ニサマデ稀有ノ疾患ニハ非ザルモ、著者等ハ最近、本疾患ト思ハル、3症例ニ遭遇シ、ソノ1例ニ於テハ幸ニ組織學的標本ヲモ得タレバ、先進諸家ノ例ニ追加シテ、之ガ成因ニ關シ、一知見ヲ補遺スルノ徒爾ナラザルヲ思ヒ、茲ニ報告スルモノナリ。

二 症例

第1例 (第1圖參照)

患者 割出某 ♀ 10ヶ月 建具商族

主訴 舌下面繫帶部ニ於ケル腫瘍。

初診 昭和7年6月29日。

家族歴 父母共ニ健在ニシテ、家系ニ於テ何等癩腫、結核性疾患ノ遺傳的關係ヲ認メズ。

既往歴 生來強健ニシテ、著患ヲ知ラズ。種痘1回善感、麻疹及ビ百日咳ニ罹患セズ。

現病歴 約2ヶ月前母親ハ偶然該兒ノ舌裏面ニ腫瘍ヲ發見シテ、大ニ驚キ、直ニ某醫ノ診ヲ乞ヒタル所、日々藥劑ノ塗布ヲ試ミラレタルモ、腫瘍ハ毫モ縮小スル傾向ナケレバトテ、本外來ヲ訪レタルモノナリ、本例ニ於テハ出血、母乳吸啜障礙及ビ言語障礙ヲ認メズ。

尙患兒ハ生後6ヶ月ニシテ上顎門齒2枚ヲ生ジ、殆ソド時期ヲ同ジウシテ下顎門齒2枚發生シ、最近又下顎門齒2枚ヲ増セリト。

現症 體格、榮養共ニ甚ダ良好ナル哺乳兒ニシテ、顔貌正常、淋巴腺腫脹等ヲ認メズ。内臟諸器官ニ異常ナク、腱反射及ビ瞳孔反射亦正常。

口腔内ヲ檢スルニ、上顎門齒2枚、下顎門齒4枚アリ。舌ヲ翻轉スルカ、或ハ涕泣ニ際シ、舌下面正中線ニ於テ舌繫帶附着部ニ、約小指頭大、黃白色ノ腫瘍ヲ認ム、表面粗糙、軟骨性硬度ヲ有シ、觸ル、モ疼痛ヲ訴ヘズ、又出血ナシ。

手術 昭和7年7月1日。

半座位ニ於テ、開口器ヲ懸ケ、舌鉗子ニテ舌ヲ翻轉シ、腫瘍ノ周圍ニ0.5%「ノボカイン」溶液約0.5立方厘米ヲ注射シ、腫瘍周圍ノ粘膜ヲ切開シ、鈍ニ腫瘍ヲ剔出セント試ミシモ、癒着強度ノ爲大部分剪刀ヲ以テ、底部ヨリ剥離セリ。次テ基底周圍ノ粘膜ヲ僅ニ剝離シタル後、粘膜創面ヲ縫合シ術ヲ終レリ。

標本所見

肉眼的ニハ直径約1.3釐、圓形ノ腫瘍ニシテ、黃白色、其ノ表面ハ粗糙ニシテ、金平糖ヲ見ルガ如ク、光澤ナキ微細ナル隆起アリ。硬度ヤ、強靱。

組織的ニハ、腫瘍ノ表面ハ異常ニ増殖セル扁平上皮細胞層ニテ被ハレ、扁平上皮層中間ニ處々ニ囊胞狀間隙アリテ、浸出液ヲ含ミ、單核圓形細胞及ビ多核白血球ノ集簇アリ、厚キ上皮層ニ於テモ、多核白血球浸潤ノ狀ヤ、著明ニ見ラル。最上層ニ纖維素析出シ、網狀ヲナシ、僅ニ肥厚セルモ、表皮ノ乳頭狀増殖分岐著明ナラズ。表皮層下部ニ結締織アリテ、乳頭狀ニ多數ノ分岐ヲ營ミ、表皮ノ増殖盛ナル爲ニ、結締織乳頭ノ個々ニ分離サレタルヲ認ム。且ツ結締織間ニ於テ、毛細血管内被細胞分裂ノ像稍著明ニシテ、多核白血球、單核圓形細胞ノ浸潤亦甚ダ強ク、毛細血管擴張シ、造結締織細胞ハ星芒狀又ハ紡錘狀ヲ呈シ、増殖ノ徴ヲ示シツ、アリ。

以上ノ所見ヨリ本腫瘍ハ、乳嘴樣炎性腫瘍ト看做ス可トセン。(第4圖參照)

第2例 (第2圖參照)

患者 五十嵐某 ♂ 2歳 教員族。

主訴 舌下繫帶部ニ於ケル腫瘍。

初診 昭和7年5月24日。

家族歴 兩親健全ニシテ、同胞3名亦強健、結核又ハ癌腫ノ遺傳的關係ヲ認メズ。

既往歴 生來健全ニシテ著患ヲ知ラズ、麻疹ハ未ダ經過セズ。

現病歴 本年4月頃患兒舌繫帶部ニ帶黃白色苔ノ如キ物ヲ發見シ、某醫ニヨリ硝酸銀塗布ニヨル腐蝕療法ヲ受ケツ、アリシモ、漸次局所ノ肥大ヲ來シタルヲ以テ本外來ヲ訪フニ至レリ。尙當時疼痛、出血及ビ哺乳困難等ノ症狀ヲ認メズ。

現症 患兒ハ體格榮養共ニ良好ナル哺乳兒ニシテ、開口セシムルニ、舌下面中央舌繫帶部ニ於テ約拇指頭大ニシテ硬度強靱ナル黃白色腫瘍ノ存在ヲ見ル。表面平滑ニシテ光澤ヲ帶ブルモ、ソノ中央部ハ白色苔ヲ以テ被ハル。上顎門齒2枚、下顎門齒3枚既ニ發生セリ。

耳鼻咽喉ニ異常ナシ。

患者ハ後日該腫瘍ノ別出ヲ約シ歸郷セルモ、再ビ來院セズ。最近患家ヨリノ消息ニヨレバ、沃度様藥品ノ塗布ニヨリ、腫瘍ハ漸次縮小シ、現在約小豆大ニ縮小セリト云フ。

第3例 (第3圖參照)

患者 島田某 ♀ 12ヶ月。

主訴 舌繫帶部腫瘍。

初診 昭和6年9月23日。

家族歴 父母共ニ健在、同胞4名ノ中3人健、1人早産、遺傳的關係ニ認ムベキモノナシ。

既往歴 熟産ニシテ母乳ヲ以テ榮養サレ生來健全ナリ。種痘1回善感。

現病歴 昭和6年8月15日夜、患兒開口ノマ、睡眠中、其ノ舌下面ニ白色圓形ノ腫瘍アルヲ母親ニヨリテ發見サル、哺乳困難、疼痛ナシ。

現症 患兒ハ榮養餘リ良好ナラズ。耳鼻咽喉ニ著變ナシ。上顎門齒2枚アリ、生後10ヶ月ニシテ發生セリト。下顎門齒亦2枚アリ、殆ンド同期ニ發生セリト云フ。舌ヲ上方ニ翻轉シ、又涕泣ノ際、舌繫帶中央部ニ於テ、約豌豆大、白色ニシテ邊縁比較的銳利ナル腫瘍ヲ認ム、舌ヲ前方ニ挺出スルトキハ、舌下面ノ該腫瘍ハ下顎門齒ニ正シク觸ル、ヲ見ル、該腫瘍ハ稍硬固ニシテ觸ル、モ出血ヲ見ズ。

手術 昭和6年9月25日。

腫瘍全別出テ行フ。鉗子ヲ以テ舌ヲ前上方ニ牽引シ、輪狀ニソノ周圍ニ切開ヲ加ヘ、底面ヨリ剝離別出セリ。腫瘍ハ伸展性ヲ缺キ、斷裂性ニ富メリ。

標本ハ散逸シテ求ムルヲ得ズ、從ツテソノ組織學の所見ヲ明ニスルヲ得ザルハ遺憾ナリ。

三 文 獻

本疾患ニ關スル東西ノ文獻ヲ今少シク詳述センニ、リガノ報告セシ以後ニ於テ、カツプチ オハソノ原因ヲ舌繫帶ノ緊張度強キニ過グル爲ナリトシ、ザネツチハ舌繫帶ノ抵抗薄弱ナルヲ誘因ノ一トシ、下顎門齒ノ尖銳ナルヲ以テ、ソノ二トセリ。オーダードハ齒牙發生ト本疾患トノ間ニハ重大ナル關係アルモノトシ、且哺乳後乳汁殘渣ノ不充分ナル拭除ヲ以テ之ガ誘因トセリ。

1909年アベツチハ本疾患ノ2例ヲ報告シ、ソノ原因ヲ下顎門齒ニヨル舌繫帶ノ損傷ニ歸シ、母ノ乳頭ノ短小ナルトキ、及ビ乳兒ノ舌繫帶ノ短小ニ過グル時、哺乳ニ際シテノ異常ナル吸啜努力ハ、以テ之ガ誘因ヲ構成スルモノナリト云ヘリ。而シテソノ腫瘍形成ニ至ルマデノ過程ニ就テハ、彼ハ次ノ如ク論及セリ。即チ外傷性起因ニヨリテ、先ヅ舌繫帶部ニ潰瘍ヲ形成シ、口腔内細菌ハ之ニ侵入シテ纖維索性炎症ヲ生ジ、痂皮ヲ形成ス。ソノ結果纖維組織增生ノ過程ヲ述リ、遂ニ被覆表皮再生機能ヲ喚起シテ腫瘍發生ニ至ルモノナリト。

更ニ組織學の所見ヲ發表セルモノヲ文獻中ニ求メンニ、Reinbachハ血管腫ナリトシ、Partsch, Misch, Callai und Phillipson等ハ舌下肉芽腫ナルコト疑フ餘地ナシト稱シ、v. Mikuliczハ血管性硬結ナリト記載セリ。Fedeハ乳嘴腫ナリトシ、之ニ贊スルモノニBurunardi, Letulle und Concetti等アリ、Callariハ纖維腫ナリトシ、Pianeseハ炎症性肉芽腫ナリト云ヘリ。

翻ツテ本邦ニ於ケル報告ヲ見ルニ、久保(猪)教授、筈原氏、林氏等既ニ20數例ヲ數フルニ至レリ。(別表參照)

今暫ク報告諸例及ビ著者等ノ3例ヲ總括シ、統計的ニ觀察シテ後考按ニ移ラン。

| 症例番號 | 報告者 | 性 | 年齢 | 齒牙發育狀態 | 組織所見 | 障碍 | 備考 |
|------|-------|---|------|----------------|-----------|------|---------------------|
| 1 | 久保(猪) | ♂ | 2歳 | 上顎門齒2 下顎門齒2 | 乳嘴腫 | (一) | 腫瘍別出 |
| 2 | 久保(猪) | ♂ | 2歳 | 上顎門齒1 下顎門齒2 | 乳嘴様纖維腫 | (一) | 腫瘍別出 |
| 3 | 筈原 | ? | 9ヶ月 | 下顎門齒2 | (一) | 哺乳障碍 | |
| 4 | 平井,手島 | ♂ | 12ヶ月 | 上顎門齒2 下顎門齒2 | (一) | 疼痛 | |
| 5 | 平井,手島 | ♂ | 8ヶ月 | 上顎門齒2 下顎門齒2 | (一) | 出血 | |
| 6 | 平井,手島 | ♂ | 9ヶ月 | 上顎門齒4 下顎門齒2 | (一) | (一) | |
| 7 | 平井,手島 | ♀ | 8ヶ月 | 下顎門齒2 | (一) | 出血 | |
| 8 | 佐久間 | ♂ | 13ヶ月 | 上顎門齒2 下顎門齒2 | (一) | (一) | |
| 9 | 林 | ♂ | 9ヶ月 | 上顎門齒1 下顎門齒2 | (一) | (一) | 下顎門齒磨滅ニヨリ消失ス |
| 10 | 林 | ♂ | 8ヶ月 | 下顎門齒2 | (一) | (一) | 下顎門齒磨滅ニヨリ消失ス |
| 11 | 塚本 | ♀ | 11ヶ月 | 上顎門齒2 下顎門齒2 | (一) | (一) | 下顎門齒磨滅, 硝酸銀塗布ニヨリ消失 |
| 12 | 平松 | ♀ | 12ヶ月 | 上顎門齒2 下顎門齒2 | (一) | 哺乳障碍 | 外科的別出効ナク下顎門齒磨滅ニヨリ消滅 |
| 13 | 平田 | ♂ | 2歳 | ? | ? | ? | |
| 14 | 掛下 | ? | 8ヶ月 | 上顎門齒2 下顎門齒2 | 癌腫 | (一) | 舌別出 |
| 15 | 松本 | ♂ | 7ヶ月 | 下顎門齒2 | 肉芽腫 | 疼痛 | 外科的ニ全治セズ下顎門齒磨滅ニヨリ消滅 |
| 16 | 松本 | ♂ | 12ヶ月 | 上顎門齒2 下顎門齒2 | 乳嘴様纖維腫(?) | (一) | 腫瘍別出 |
| 17 | 松本 | ♂ | 12ヶ月 | 上顎門齒2 下顎門齒2 | 乳嘴様纖維腫(?) | (一) | 腫瘍別出 |
| 18 | 北野 | ♂ | 21ヶ月 | 上顎門齒2 下顎門齒2 | (一) | (一) | 腫瘍別出 |
| 19 | 有富 | ? | 29日 | 先天性下顎門齒2 | (一) | (一) | 抜齒 |
| 20 | 椿 | ? | 9ヶ月 | 上顎門齒? 下顎門齒? | (一) | (一) | 下顎門齒磨滅ニヨリ治癒 |

| | | | | | | | |
|----|-------------|---|------|----------------|---------|-----|-------------|
| 21 | 椿 | ? | 14ヶ月 | 上顎門歯? 下顎門歯 | (-) | (-) | 下顎門歯磨滅ニヨリ治癒 |
| 22 | 椿 | ? | 10ヶ月 | 上顎門歯? 下顎門歯 | (-) | (-) | 下顎門歯磨滅ニヨリ治癒 |
| 23 | 大 鶴 | ? | 9ヶ月 | 上顎門歯2 下顎門歯2 | (-) | (-) | 下顎門歯削去ニヨリ治癒 |
| 24 | 石 井 | ♂ | 10ヶ月 | 上顎門歯2 下顎門歯2 | 乳嚙様纖維腫 | (-) | 腫瘍別出 |
| 25 | 石 井 (森口) | ? | 4ヶ月 | 先天性下顎門歯 | (-) | (-) | |
| 26 | 豊田, 梁山 | ♀ | 10ヶ月 | 上顎門歯2 下顎門歯4 | 乳嚙様炎症腫瘍 | (-) | 腫瘍別出 |
| 27 | 豊田, 梁山 | ♂ | 2歳 | 上顎門歯2 下顎門歯3 | (-) | (-) | |
| 28 | 豊田, 梁山 | ♀ | 12ヶ月 | 上顎門歯2 下顎門歯2 | (-) | (-) | 腫瘍別出 |

I 年 齢

生後ノ月數ヲ以テ表サザル^{(1),2),(13),(27)}ノ4例ヲ除キ, 最短29日ヨリ最長21ヶ月ニ至ル。

平均年齢 約10ヶ月

II 性 別

記載ノ明瞭ナル20例ニツキ總括スルニ

♂15 ♀5

即チ男兒ハ女兒ノ3倍ニ當ルモ, 何等醫學的根據ヲ發見スル能ハズ。

III 齒牙發生狀態

記述不明ナル⁽¹³⁾ヲ除キ, 他ノ27例ニ於テハ總テ下顎門歯ヲ有シ, ソノ齒數ノ記載ヲ缺ク4例及ビ⁽²⁶⁾ノ4枚⁽²⁷⁾ノ3枚ヲ有スルモノノ他ハ各2枚發生セリ。上顎門歯ヲ有スルモノ18例ニシテ, 中2例ハ各1枚, 1例ニ於テ4枚ヲ有スルモ, 他ハ各2枚ヲ有セリ。

興味アルハ, ^{(18),(25)}ノ2例ニ於テ先天性下顎門歯ノ發生ヲ見ル事ナリ。

IV 障 碍

記載不明ナル⁽¹³⁾ヲ除キ, 27例ニ就キテ考察スルニ下記ノ如シ。

| | |
|-----------|----|
| 障碍ヲ訴ヘザルモノ | 21 |
| 哺乳障碍 | 2 |
| 疼 痛 | 2 |
| 出 血 | 2 |

即チ特別ノ障碍ヲ伴ハザルモノ8割ノ多キヲ占メ, 之等ハ何レモ舌下面ノ異常ナル腫瘍ニ驚キテ醫ノ門ヲ敲キタルモノナリ。

V 組織所見

明確ニ組織學的檢索ヲ遂ゲタルモノハ, 久保(猪)教授ノ乳嚙腫⁽¹⁾, 乳嚙様纖維腫⁽²⁾ノ各1例, 掛下氏ノ癌腫⁽¹⁴⁾ノ1例, 松本氏ノ肉芽腫⁽¹⁵⁾ノ1例, 石井氏ノ乳嚙様纖維腫⁽²⁴⁾ノ1

例等ノ數例ニ過ギズ。尙松本氏ハ組織學的ニ乳嘴様纖維腫ノ如キ像ヲ呈セル2例⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾ヲ報告セリ。

以上ニ著者等ノ乳嘴様炎性腫瘍ノ第1例ヲ加ヘテ總括スレバ次ノ如シ。

| | |
|---------|---|
| 乳嘴様纖維腫 | 4 |
| 乳 嘴 腫 | 1 |
| 肉 芽 腫 | 1 |
| 乳嘴様炎性腫瘍 | 1 |
| 癌 腫 | 1 |

即チ各例ニ於ケル組織像ハ一様ナラザルモ、只掛下氏ノ報告セル癌腫ノ1例⁽¹⁴⁾ヲ除キテハ、凡テ良性ニシテ、乳嘴様纖維腫、乳嘴腫又ハ炎性腫瘍ノ像ヲ呈ス。

VI 治療ニ關スル摘要

治療ニ就テ記載アルハ、合計19例ニシテ、此ノ内8例ニ於テハ外科的ニ腫瘍ノ剔出行ハレ、他ノ9例ハ下顎門齒ノ磨滅又ハ抜齒ヲ試ミラレタルトコロ、ソノ效果ニ就テノ記載ナキ1例ヲ除キタル、殘リノ8例ニ於テハ凡テ腫瘍ハ縮小シ、消褪スルニ至レリ。掛下氏ノ1例ハ、腫瘍ノ性質上舌剔出ヲ施行サレタリ。

四 考 按

以上ノ文獻總括ヲ通覽シ、著者等ノ3例ニ少シク考察ヲ加ヘンニ、1例ハ2歳ノ男兒ニシテ、2例ハ女兒ニシテ、滿12ヶ月及ビ滿10ヶ月ナリ。又齒牙發生狀態ヲ見ルニ上顎門齒各2枚ヲ有シ、下顎門齒ハ第1例ニ於テハ4枚、第2例ニ於テハ3枚、第3例ニ於テハ2枚既ニ發生ヲ終ヘタリ。

次ニ第1例ヨリ得タル標本ノ組織學的所見ヨリ該腫瘍ノ發生ニ就キ、イサ、カ卑見ヲ披瀝センニ、該腫瘍ハ、果シテ炎症性素因ニ於テノ乳嘴様増殖ナリヤ、或ハ眞性腫瘍ナル乳嘴腫ノ發生アリテ、之ニ炎症現象ノ隨伴セルモノナリヤ、茲ニ斷言スルコトハ困難ナルモ、該腫瘍ニ於テ表皮ノ乳嘴様隆起ノ著明ナラザル點、乳嘴體増殖ノ過度ナラザル點等ヨリ考察スルニ、恐ラク前者ニ屬スルモノト思惟スルガ妥當ナラン。即チ下顎齒牙ニヨル器械的刺戟ガ根原ヲナス慢性炎症性腫瘍ナランカト推論スルモノナリ。

久保(猪)教授ハ本疾患ニ對スル原因ニ就キ次ノ如ク推論セリ。哺育法ノ不規則ナル人種、例ヘバ殊ニ伊太利人、本邦人ニアリテ、門齒ノ發生後モ尙哺乳ヲ續クルガ爲、齒冠ノ器械的刺戟ニヨリテ舌繫帶部ニ龜裂ヲ生ジ、潰瘍トナリ、口腔内細菌ハ此ノ抵抗力減少部ニ發育増殖ヲ逞フシ、延ヒテハ組織ノ増殖ヲ喚起スルモノナラント。

之レ正シク前述セルアベツチノ説ト一致セルモノニシテ、此ノ推論ニシテ果シテ眞ナリトセバ、著者等ノ1例ニ於テ見タル乳嘴様炎性腫瘍ノ成立機轉ニ對シテモ、略ボ同様ナル解釋ヲ下シ得ベキカ。又前述ノ⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾⁽¹²⁾⁽¹⁵⁾⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾⁽²¹⁾⁽²²⁾⁽²³⁾ノ10例ニ於テモ、單ニ下顎門齒ノ磨滅又ハ抜齒ニヨリテ腫瘍ノ消褪セルハ、下顎門齒ガ本症ノ發生ニ於ケル有力ナル一因子タル事

ヲ示スモノニシテ、既ニ報告サレタル本症ノ各例ニハ下顎門齒ノ發生ヲ缺クモノナシ。

次ニ本腫瘍ヲ以テ眞性腫瘍ナリト報ゼル諸例中、乳嘴腫、乳嘴様纖維腫ノ成因ニ就キテ考フルニ、ボーストハ該腫瘍ノ過半数ハ、慢性刺戟ニヨリテ起リ、且ツ實驗的ニモ之ヲ證明シ得タリト報告セリ。由之觀之カ、ル症例ニ於テモ亦、下顎門齒ニヨル慢性刺戟ガ齶ラス炎症性現象ニソノ成因ヲ置クモノト考フルモ不當ナラザルベシ。而シテ同ジク下顎門齒ノ慢性刺戟ニヨルモ、一ハ乳嘴腫又ハ乳嘴様纖維腫ノ如キ眞性腫瘍ヲ生ジ、一ハ乳嘴様炎症性腫瘍、若シクハ肉芽腫ノ如キ炎症性腫瘍ヲ生ズルハ何故ナリヤ、或ハ發生ノ時期ニヨリ組織像ノ相違ヲ示スモノニシテ、最初ハ炎症性腫瘍ニ過ギザリシモノガ刺戟ノ持續ニヨリ、漸次乳嘴様纖維腫又ハ乳嘴腫ニ移行スルモノカ、或ハ何等カ先天性素因トモ云フベキモノアリテ、一ニ於テハ終始炎症性腫瘍ヲ以テ經過シ、一ニ於テハ眞性腫瘍ヲ發來スルモノナリヤ、著者等ノ卑見ヲ以テ推論ヲ下セバ、本腫瘍ノ發生ハ舌繫帶ニ加ハル齒牙刺戟ガ炎症性現象ヲ伴ヒ、肉芽組織ヲ形成シ、追テハソノ上皮乳嘴狀ニ増殖シ、次デ乳嘴様纖維腫ニ移行シ、遂ニ乳嘴腫即チ眞性腫瘍ニ達スルモノナラント思惟セラル。尙別表ノ報告諸例ニ於テ組織學的所見ト生後月數トノ關係ヲ觀察スルニ、生後7ヶ月ナル松本氏ノ1例⁽¹⁵⁾ハ肉芽腫、著者等ノ1例⁽²⁶⁾ハ乳嘴様炎症性腫瘍ニシテ生後10ヶ月、次デ松本氏ノ2例⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾ハ乳嘴様纖維腫ニシテ各生後12ヶ月、同ジク乳嘴様纖維腫ナリト報告セル石井氏ノ1例⁽²⁴⁾ハ生後10ヶ月、久保教授ノ1例⁽²⁾ハ2歳ニシテ、同氏ノ他ノ1例ナル乳嘴腫⁽¹⁾ハ2歳ノ男兒ニ發生ヲ見タリ。之等症例ニ於ケル腫瘍ノ發育經過ニ就キテハ知ル由ナキモ、大體ニ於テ年齢小ナル程炎症性腫瘍ノ傾向ヲ帶ブルモ、反之年齢増スニ從ヒテ、眞性腫瘍ノ形態ヲ呈示セルモノ多キヲ加フルガ如ク思考セラル事實ハ著者等ヲシテソノ卑見ヲ一層力強ク持セシムルモノナリ。石井氏ハ本症ノ各例ニ於テ組織像ノ同ジカラザルハ、只時期ノ相違ニヨルモノニシテ、根本的ニソノ像ヲ異ニスルモノニ非ズト述ベタリ。

五 結 論

(1) 本症ハ生齒期後ノ哺乳兒ニ發生スルモノニシテ、著者等ノ統計ニヨレバ生後最短29日ヨリ最長21ヶ月ニ及ビ、性別ニ關シテハ、男兒ハ女兒ヨリモ遙ニ多キモ、此ノ點ニ就キ何等醫學的根據ヲ發見セズ。

(2) 本症ノ成因ニ就キテハ、從來諸家ノ記述セル如ク、著者等ノ蒐集セル各症例ニ於テモ亦凡テ下顎門齒既ニ發生シ、之ガ及ボス器械的反覆刺戟ハ本腫瘍發生ニ極メテ緊密ナル原因的要素ヲ占ムルモノナルベシ。

(3) 本腫瘍ノ病理組織學的所見ハ各症例ニヨリ同ジカラズ、即チ肉芽腫、乳嘴様炎症性腫瘍、乳嘴様纖維腫、乳嘴腫等相異ナレル像ヲ呈ス。而シテ之等組織像ノ相違ニ就キテハ、本腫瘍ノ發育經過時ヲ追フテ檢索スルニ非ザレバ斷言スル事不可能ナルモ、恐ラク多クノ場合、腫瘍ノ發育時期ノ相違ニヨルモノナルベク、初期ニ於テハ炎症性腫瘍ナリシモノ、日ヲ經ルニ伴ヒテ眞性腫瘍ノ像ヲ示スニ至ルモノニ非ズヤ。

撰筆スルニ臨ミ御懇篤ナル御指導ト御校閲ヲ賜ハリタル 恩師松田教授並ニ病理組織學的所見ニ對シ御教示ヲ辱フセシ病理學教室中村教授ニ深謝ス。

附記 本論文中第1例, 第2例ハ昭和7年7月大日本耳鼻咽喉科會北陸地方會第13回例會ニ於テ, ソノ大要ヲ報告シ, 併セテ標本ヲ供覧セリ。尙第3例ハ昭和6年12月同北陸地方會第10回例會ニテ岩田惣七氏ノ報告セルモノナリ。

引用文獻

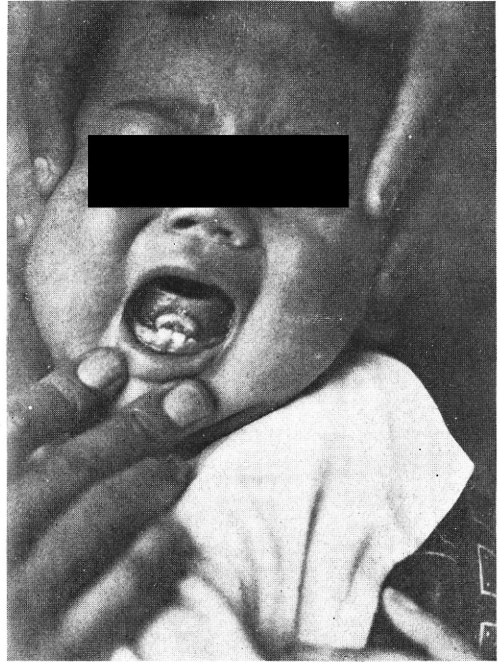
- 1) **A. Riga** : Archiv für Kinderheilkunde. Bd. 3.
- 2) **Abetti** : Jahrb. für Kinderheilkunde. 1909.
- 3) **v. Mikulicz u. Kümmel** : Krankheiten des Mundes.
- 4) **Ludwig Aschoff** : Pathologische Anatomie.
- 5) **佐久間章一郎**, 岡山醫學會誌, 第127號.
- 6) **久保猪之吉**, 東京醫事新誌, 2158號.
- 7) **平井金三郎, 手島敬直**, 實驗醫報, 151號.
- 8) **塚本政治**, 十全會雜誌, 第32卷, 第9號.
- 9) **平松享三**, 耳鼻咽喉科, 第3卷, 第1號.
- 10) **有富重國**, 兒科雜誌, 357號.
- 11) **林眞爾**, 兒科雜誌, 346號.
- 12) **笠原道夫**, 實驗醫報, 177號.
- 13) **掛下玉男**, 大日本耳鼻咽喉科會報, 35卷, 9號.
- 14) **平田松太郎**, 耳鼻咽喉科, 3卷, 11號.
- 15) **北野伊八郎**, 耳鼻咽喉科臨牀, 26卷, 2號.
- 16) **椿英一**, 北越醫學會誌, 46年12號.
- 17) **大鶴悅郎**, 北越醫學會誌, 46年, 12號.
- 18) **松本久夫**, 鹿兒島醫學雜誌, 8年2號.
- 19) **石井俊次**, 耳鼻咽喉科, 5卷, 5號.
- 20) **久保猪之吉**, 臨床的耳鼻咽喉科學.

豊田・栗山論文附圖

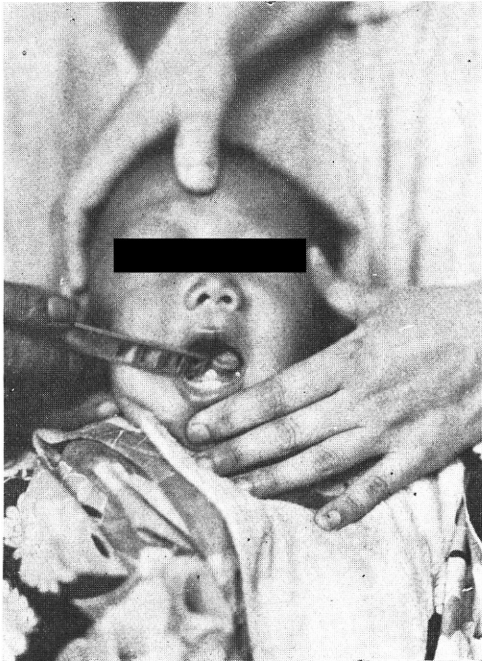
第 1 圖



第 2 圖



第 3 圖



第 4 圖



3 × 3 (82倍)